



高原の風だより

2023(令和5)年11月 発行 <第26号>

夕日を生かしたまちづくり 愛媛県伊予市双海町

水平線にしずむ幻想的な夕日に感動



西瀬戸内の水平線にしずむ幻想的な夕日



モニュメントの穴から夕日が光を放つ

平成 19(2007)年に高知県馬路村で全国まちづくり交流会が行われた。その時に基調講演してくれた方が愛媛県伊予市双海町の若松進一さんだった。元役場職員で国土交通省の観光カリスマにも認定されている若松さん。過疎と地盤沈下に悩む漁村を、独自のアイデアとパワーで年間 55 万人の集客を誇る観光地へと作り上げた。夕日を生かしたまちづくりの実績と熱い話しはとても大きなインパクトがあった。その後、郡公民館大会の講師で木曾に来ていただくなど大変お世話になっている。年賀状などで「いつか機会を見ておじゃましたいです」とやり取りしていたが、アッという間に 15 年を超える歳月が流れてしまった。

そんな折、丹波篠山にいる孫の祖父母参観日に出席することになった。そこで日程を少し早め篠山へ行く前に若松さんに会うため双海町を訪れた。



今もパワフルな若松さん(左)と私

観光カリスマの若松さんと 15 年ぶりの再会

愛媛県伊予市双海町は、伊予灘に面し山が海岸まで迫ってくる 16 キロ余りの海岸線の町。昔から地引網によるイワシ漁が盛んでミカンと漁業の町である。松山からも 12 キロ余りとそんなに遠くない。私たちは松山空港からレンタカーを借りて若松さんとの待ち合わせ場所の「ふたみシーサイド公園」に向かった。そこで 15 年ぶりの再会を果たし、その後は若松さんの車で半日余りにわたってまちづくりの活動拠点施設など町内の代表的な建物などを案内していただいた。

そして最後は車を止めておいたシーサイド公園へ戻り、当時の苦労話などについてじっくり耳を傾けた。そうこうしているうちに時計の針が 17 時を回り、あの有名な夕日を見ることになった。「秋の日はつるべ落とし」というが、本当にアッという間に西瀬戸内の水平線に真っ赤な夕日がしずみ始めた。それは想像を絶する幻想的な光景で、映画のワンシーンでも見ているような感動的なものだった。

～過疎の町が 55 万人訪れる観光の町に～

コンセプトは夕日のまちづくり

外部の人に気づかされた美しい夕日の価値 ～夕日のまちづくりを決意～

双海の夕日を見て「こんな夕日は初めて」と感慨深げに語った NHK のディレクターの一言が、若松さんが夕日に注目するきっかけになった。自分のふるりの夕日の美しさの価値を外部の人に気づかされたと感じた若松さん。国内の夕日で有名な観光地を見て回った。夕日を自慢している地域はあったが、夕日をまちづくりに生かしている所は見当たらなかった。「夕日をまちづくりのコンセプトにしよう」と若松さんは決意した。しかし、身近な景色が高い価値を持つことへの住民の理解は容易に得られなかったという。青年団の仲間や知人を説得するなど並々ならぬ苦労があったようだ。



ふたみシーサイド公園の恋人岬（左奥に石のモニュメントがある）

恋人岬の先端に石のモニュメント ～若いカップルに最高のデートスポット～

夕日をまちづくりのコンセプトにした代表的な施設が「ふたみシーサイド公園」だ。緩やかな砂浜が数百メートルにわたって広がり、後方には観覧用のデッキが設置されている。公園内にある恋人岬の先端には高さ4m余りの石のモニュメントがある。穴が開いていて、春分の日と秋分の日にはその穴に夕日がきれいに入って見えるように作られているという。若いカップルには最高のデートスポットになっている。

下灘駅でフラットホームコンサート ～ロマンチックなシチュエーション～

日本一海に近い駅といわれているのが伊予市双海町にある JR 下灘駅。映画「男はつらいよ」の舞台になったこともあり、寅次郎が寝そべったベンチもある。



フラットホームコンサートが行われる JR 下灘駅

この下灘駅を一躍有名にしたのが毎年 9 月の第 1 土曜日に開催している「夕焼けフラットホームコンサート」。若松さんが役場職員時代に手掛けた代表的なイベントの一つだ。田舎の小さな駅を会場にするという奇抜なアイデアとしずむ夕日をバックに行うというドラマチックなシチュエーションが反響を呼び、多くの観客が訪れるという。すでに 35 回を数える長寿イベントとして定着している。

下灘駅はこれまで青春 18 キップのキャンペーンポスターとしても何度も取り上げられたほか、映画や雑誌、コマーシャルなどにもたびたび取り上げられているという。この日も平日にもかかわらず若いカップルなどが青い海をバックに楽しそうに記念写真を撮っていた。

翠 (みどり) 小学校を視察



愛媛県内で最も古い木造校舎の翠小学校

～愛媛県内最古の木造校舎～

築 91 年という愛媛県内最古の木造校舎の翠小学校を視察。玄関へ向かう途中、校庭で遊んでいた数名の児童らが「しんちゃん！」と若松さんのところへ駆け寄ってきた。今も社会活動を行っている若松さんは、みんなと顔馴染みだ。

先生にあいさつした後、子どもたちが 3 人で校舎内を案内してくれた。「ここが校長室」「ここはみんなで給食を食べるランチルーム」。みんな元気いっぱいの明るい子どもたちだった。

児童数 20 数名の小さな学校だが、「一人ひとりを温かく見守るアットホームできめ細やかな教育」が自慢だという。

同小学校は平成 19 年から 3 年余りをかけて耐震改修を行った。改修に当たっては東京大学生産技術研究所の協力を得て、詳細な現地調査を実施。筋交いの有無や接合部の仕様、部材断面などを検討して耐震改修設計を行った。改修前は震度 6 程度の地震で倒壊の危険が高い校舎であったが、耐震改修により耐震性が確保できたほか地域の防災拠点として建築基準法の 1.3 倍の強度を保つ校舎になったという。

標高 130m の高台に「人間牧場」

～地域づくりのノウハウ学ぶ活動拠点～

「若松さんは畜産経営をしているの？」と尋ねられることがある。若松さんのまちづくりの取り組みの一つが「人間牧場」だからだ。人間牧場とは畜産を経営しているのではなく、人づくりや地域づくりのノウハウを学ぶための活動拠点のことを指す。「山道だから私の車に乗って」と言われ、若松さんの車に乗り込みシーサイド公園から 15 分余り狭い山道を進み、途中から歩いて「人間牧場」に到着。その場所は西瀬戸の島々を一望できる標高 130m の高台にあった。若松さんが自費を投じて造った 2 階建ての研修施設があり、大きな窓を開けるとウッドデッキが海側に張り出していた。そこからの眺めはまさに絶景だった。すぐ近くには五右衛門風呂もあり足湯や温浴を楽しむこともできるようになっていた。



まちづくりの活動拠点「人間牧場」

地元子どもたちがミツバチの飼育観察を行ったり、サツマイモの植え付けなどの農業体験を行ったりさまざまな活動の拠点になっているという。そのほか全国各地から地域づくりを学ぶために現在も多くの若者や研究者などが訪れているようだ。

私 設公民館「煙会所 (えんかいじょ)」 ～4 畳半で将来の夢語る～

今回、若松さんの自宅にも案内していただいたが、広い自宅の敷地の隅に小さな建物があつた。私設公民館「煙会所」である。若松さんが青年団活動をしている頃、若者の溜まり場がなかったことから自宅に造ったのだという。8 人ほどしか入れない 4 畳半の小さな部屋の真ん中に囲炉裏がある。囲炉裏の火を囲んで車座になり、地域づくりや将来の夢を語ることは大きな意義があるのだという。今までにまちづくりを志す多くの若者がこの場所で熱く語り合い交流を深めて帰って行った。



広さ 4 畳半の「煙会所」

かつて「夕日」は「朝日」に比べマイナスイメージしかなく、負を意識させる存在でしかなかった。若松さんは、それを逆手にとって住民とともに持ち前の行動力で「夕日」をキーワードに、オンリーワンのまちづくりを目指して取り組んできた。

まちづくりは、まちを語る物語づくり運動だと若松さんは考える。「かつてふる里を語る時『松山の近くの・・・』と言っていた子どもたちが、今では『夕日の日本一きれいな双海町です』と堂々と言えるようになったことが一番嬉しい」としみじみ話してくれた。

私は平成元年から30余年にわたり NHK ふるさと通信員を務めてきました。最初はラジオのレター担当で、毎月地域話題をお伝えしていました。その後、ビデオ担当になり地域の行事をはじめ木曾の日帰り温泉、そして最後は地域で活躍する元気なお年寄りを紹介する「ご長寿列伝」を担当させていただきました。「ご長寿列伝」はこの紙面でも紹介させていただきましたが、コロナ禍の影響などもあり通信員制度がなくなり番組も3月に終了しましたので、これからは元気で活躍している町民の皆さんを紹介していきたいと思っております。よろしくお願ひします。

町民登場

みずの かな
水野 佳奈さん (55歳・木曾町開田高原) ㊴

パンが焼きあがった時の香りが魅力 ～メニューボードも手作り～

2年ほど前にご主人と2人開田高原へ移住した水野佳奈さん。A コープの奥でカフェ「マルクコーヒースタンド」を営んでいる。大学では食物科を専攻するなど、20代の頃から起業したいという思いを持っていた。ご主人の仕事の関係で海外での生活も経験しているが名古屋へ転勤になった時、料理教室のお手伝いを始め講師を務められるまでに腕を上げた。いろいろ現場で経験したいとパン屋やケーキ屋、社員食堂などでもバイトをした。パンは100種類ほど作ることができるが「焼きあがった時のあの香りが何とも言えない。焼きたてを食べられる」とその魅力を話す。



水野佳奈さん

こだわりはほかにもある。メニューボードも店のインテリアの一つと考えている佳奈さん。「店を自分でやるんだったらメニューボードも自分で作ろう」と名古屋で1年間、チョコレートを学んだ。佳奈さんの手による素晴らしいメニューボードが店に掲げられている。腕前はプロ級だ。

カフェではコーヒーや焼き菓子、軽食などを扱っているがお勧めはカヌレやブラウニーなど手作りの焼き菓子だ。

「お店を始めたことによって交流機会が広がった」という佳奈さん。今夏はご主人らと御嶽山に登った。この冬はスキーを滑るのを楽しみにしている。「店を始めて半年くらいは夢中でやっていた余裕がなかったが、これからは開田高原での生活も楽しみたい。」と笑顔が広がった。



佳奈さん手作りのメニューボード

私の本棚

『京都祇園もも吉庵のあまから帖』㊵

(志賀内泰弘 著・PHP 文芸文庫)

いつも大変お世話になっている志賀内先生の著書。甘味処「もも吉庵」を営む女将もも吉の、辛口ながらも温かな言葉は、悩める人の心に一条の光をもたらす。商売に見の入らない骨董商を改心させた女性秘書の純真。能率・効率を追求した経営者の窮地を救ったある約束・・・古都の風物を背景にひたむきに生きる姿を描いた感涙必至の人情物語。秋の夜長にぜひお勧めしたい一冊です。



編集後記

ようやく念願かなって過日、愛媛県伊予市双海町に若松進一さんを訪ねることができた。あのふる里に対する熱い思いと斬新なアイデア、そして行動力を少しでも見習いたいと思う。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携 帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com



Facebook